

ADHDのある小学4年生の児童が、通級による指導において、苦手であるひらがなの習得を目指すための合理的配慮に関する事例

1. 事例の概要

A児は、通常の学級に在籍する、注意欠陥多動性障害（ADHD）と自閉的な傾向を併せ有するB小学校に在籍する4年生である。小学2年生から通級による指導を受け、通常の学級でも合理的配慮の提供を受けている。

A児は、他の児童とトラブルになることが多く、学習面では、読み書きへの困難を抱えている。小学2年生の5月より、通級による指導で個別の指導を受けるようになった。通級による指導では、専門性のある教員が、ひらがな文字の獲得、言語力を伸ばす指導と、自己をコントロールする力を養う指導を行っている。通常の学級では、他の児童とトラブルが生じた場合には、A児からじっくり話を聞き、A児にも納得できる結論を導きだすように指導・支援している。学習面では、漢字にルビをふる、音楽のリコーダーの学習では楽譜を変える等の変更を行い、「できる・わかる」を感じ、達成感をもつことができるように配慮を行った。

その結果、A児は他の児童とのトラブルが少なくなった。また、自らクールダウンする場所に行き、自分の気持ちを鎮める様子が見られるようになった。学習面でも達成感が味わえる経験を通して、意欲的に取り組む場面が多くみられる。

キーワード 注意欠陥多動性障害（ADHD）、自己コントロール、クールダウン

2. 児童の実態

A児は、小学校入学当初、自分の思いを分かって欲しいという思いが強く、学級担任に話をすると止めることが難しい状態であった。また、暴れたり、大声で怒鳴ったりする様子が見られ、他の児童とトラブルになることが多かった。他の児童がA児を注意することで、さらにA児がイライラして、気持ちが落ち着かない日も多くなった。小学1年生の2学期より通院するようになり、医者 の指示で、薬の服用を始めた。

小学2年生の1学期より、通級による指導を受けるようになり、週6時間の通級による指導を続けている。通級による指導の結果、A児が他の児童とトラブルを起こすことは少なくなり、トラブルを起こしても、自分から通級指導教室に行き、クールダウンする様子も見られるようになった。

学習面では、ひらがな文字の獲得に不十分さがみられるが、通常の学級での授業は、基本的には他の児童と同じ内容の学習をしている。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 児童の指導・支援上の課題については、C大学の特別支援教育研究センターや医学、心理学、教育学の研究者の協力を得ている。スクールカウンセラーが週2回程度来校し、保護者相談を行っている。【基礎1】
- 学期に1回程度行われる授業研究において、特別なニーズのある児童への授業における指導・支援の在り方について、必ず検討するようにしている。【基礎2】

- 学期に1度はケース会議を行い、各児童の個別の指導計画の達成度や課題などについて検討し、必要に応じて計画の変更を行っている。【基礎3】
- 通級による指導担当教員が児童の実態に応じた教材・教具づくりを行っている。【基礎4】
- 全学級に書画カメラを設置している。高学年には電子黒板の設置、低・中学年には、教室天井設置型プロジェクターで電子黒板と同じ機能を持たせている。【基礎5】

4. 合意形成のプロセス

A児の保護者は、A児が他の児童とのトラブルを起こすため、謝罪することが多く、A児の子育てに悩んでいた。スクールカウンセラーとの相談や病院への通院なども行ってきた。そのような中、小学1年生時の学級担任から、通級による指導の利用に関する申出があり、小学2年生の4月末の家庭訪問で学級担任と保護者との間で話合いを行った。A児自身とは丁寧に話合いを重ね、「ひらがなを覚えて書けるようになりたい」という願いを引き出し、学級担任と通級による指導担当者で共有した。また、保護者とは、毎学期に1回、懇談を行っている。懇談時には、通級による指導担当者も参加し、A児が学校で努力する様子を伝えたり、A児の課題についても話合ったりして、今後の指導や支援の方向を確認し合っている。

5. 合理的配慮の実際

- 教材や板書等の漢字にはルビを振った。また、タブレット型端末（写真）を使ったり、書画カメラで教材を拡大したり、できるだけ実物を見せたりして授業を進めている。【合理①-1-1】
- 他の児童とトラブルがあったときやすべきことが上手いかなかったときなどは、A児がクールダウンをするために、教室外に出てもよいことを伝えている。【合理①-2-3】
- 学期に1回のケース会議や、日常的に打ち合わせる機会をつくるように努力した。そこには、スクールカウンセラーや合理的配慮指導員も参加している。【合理②-1】



写真 通常学級におけるタブレット型端末を使った学習

6. 本事例の成果と課題

本事例の成果として、行動上の課題をA児自身が克服しようとする様子がみられるようになったことが挙げられる。学習においても、A児に学習内容が分かりやすくなるように工夫や配慮することで、文字や漢字などの国語の学力をつけ、A児は意欲的に取り組むようになった。

課題としては、これまで取り組んできたことを継続するとともに、A児が、思春期や青年期に向かうために、どのような配慮が必要となるか検討する必要がある。今後も、通級による指導を受けながら、これまで以上に、学習面におけるA児への配慮の在り方について検討していくことが課題である。